雨にもマケズ

3.11から　6

手結ぶ漁師と起業家

消費者を出資者に
漁業を都会と「育てる」

養殖業が盛んな宮城県石巻市の雄勝地区で昨年末、粉雪が舞う中で漁業体験のイベントが行われた。主催は地元の漁師らでつくる合同会社「OHガッツ」。代表の伊藤浩光(五〇)は全国から集まった約三十人に「波が高いので気を付けて」と注意を促しながら、手際良くホヤの養殖の手順を教えた。伊藤の傍らには東京都世田谷区の起業家・立花貴(四二)がいた。

石巻の漁師と東京の経営者。本来なら交わるはずのない二人は「3・11」によって出会い、今は漁業の見直しに取り組んでいる。

●

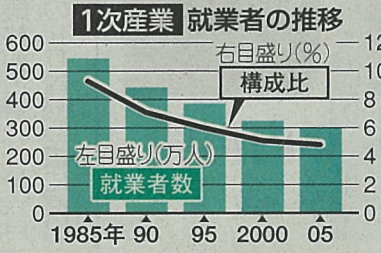
昨年三月十一日、「地球が壊れる鈍い音」と激しい揺れに見舞われた。高台に避難した伊藤は、津波にのまれる街を見下ろし、自分に言い聞かせるようにつぶやいた。「古い漁業を変えるチャンスだと思おう」

海産物は消費者に届くまでに多くの業者が関わり、漁師には小売価格の四分の一しか渡らない。収入は目減りを続ける。青年は漁師になりたがらず後継者不足は深刻だ。伊藤は五十歳になったが、この世界では若手。震災前から「補助金依存がまかり通る浜の常識は立ちゆかない」と限界を感じ、自分たち「次世代」が再興するしかないと思っていた。

●

三月末。立花は、ボランティアに参加していた。

養殖体験イベントで、参加者の作業を見守る伊藤浩光さん(手前左)と立花貴さん(その右)＝宮城県石巻市で(戸田泰雅撮影)



●

政府は一次産業に二次産業(製造業)と三次産業(サービス業)の要素を加える六次産業化を目指すが、成功例は少ない。市場を考えない独りよがりな取り組みが多いからだ。

「OHガッツ」も似た点があると思った立花は、出資者に海産物を郵送する制度を「そだての住人」と名づけた。制度そのものは、さほど珍しくないが、参加すれば新しい漁業を「育てる」ことになると発信し続けた。ボランティアしたくてもできない。募金に応じても有効に使われるのか疑問を持つ。そんな人たちが「そだての住人」になった。八月以降、一口一万円の出資は約二千口集まり、それを元手に九月に養殖を再開できた。伊藤と立花は、ちょっとした工夫で漁業再生につながる感触をつかんだ。

ことし元旦、立花は雄勝湾を一望する神社に出向いた。昇る太陽を望みながら「日本の未来のため、小さなことを積み重ねる年にしたい」と誓った。

立花はすでに東京と石巻を車で百往復している。走行距離は十万キロを超えた。そのたびに東京と石巻の距離が短くなるような気がしている。

(敬称略)

概要によると、運転を開始して四十年を経定めはなく、運転開始従来は原発の寿命に当相は記者会見で「四細野豪志原発事故担賀1号機(福井県)や日本原子力発電の敦済み核燃料を貯蔵する地の原発から出る使用固めた。使用済み核燃国内に建設する方針をする仕組みとしては青森県内の核燃料サイクるが、完成してもすべてを受け入れるのは困

きょうの紙面

大震災関連ニュース
2　サケの遡上 1.5倍
4　都が備蓄条例検討
22 23 調査から福島除外
25　尚志高校晴れ舞台
一般ニュース
国際　8
金正恩氏への忠誠競う
ニッポンの女子力　10
貧困から子どもを救う
スポーツ　19